



Title	学校運動部活動研究の動向・課題・展望：スポーツと教育の日本特殊的関係の探求に向けて
Author(s)	中澤, 篤史
Citation	一橋大学スポーツ研究, 30: 31-42
Issue Date	2011-10-01
Type	Departmental Bulletin Paper
Text Version	publisher
URL	http://doi.org/10.15057/19411
Right	

4. 学校運動部活動研究の動向・課題・展望

—スポーツと教育の日本特殊的関係の探求に向けて—

中澤 篤史

1. 緒言

本稿の目的は、中学・高校の学校運動部活動¹⁾を対象とした社会科学的な研究を包括的にレビューし、その動向・課題・展望を論じることである。

運動部活動の研究は、とくに日本とアメリカで、社会科学の多様な領域で蓄積されてきた。すでにこれらのレビューが、アメリカでは行われている。代表的なものとしては、スポーツ社会学者による、McPherson et al. (1989, pp.65-92)、Sage (1998, pp.253-275)、Rees and Miracle (2001)、Coakley (2003, pp.482-525)、Eitzen and Sage (2009, pp.90-110) などがある。それ以外に、教育学者が文化部も含めた課外活動の教育的効果に関する研究群をまとめた、Holland and Andre (1987)、Feldman and Matjasko (2005) もある。一方で日本では、「スポーツの社会化」に関するレビュー論文 (山本、1987; 山口・池田、1987) の中で運動部活動参加者の特徴や背景などについて部分的にまとめられているが、それ以外の領域・テーマも含めた包括的なレビュー論文は無いと言ってよい。そこで、本稿では、先行するレビュー論文を参照しながら、日本とアメリカを中心とした運動部活動研究を包括的にレビューする。

以下では、まずその動向を、「教育学領域」「体育・スポーツ科学領域」「社会学／心理学領域Ⅰ (参加・適応研究)」「社会学／心理学領域Ⅱ (機能・効果研究)」「社会学／心理学領域Ⅲ (顧問教師研究)」「歴史学領域」「日本研究 (Japanese studies) 領域」に分けて整理する。つぎにその課題を、運動部活動が成立していること自体が不思議であることを論じながら、「学校運動部活動の形成・拡大・維持過程の解明」として指摘する。最後にその展望を、運動部活動の国際状況を概観しながら、

「スポーツと教育の日本特殊的関係の探求」として論じる。

2. 動向

2-1. 教育学領域

教育学領域では、基本的に、運動部活動研究が少ない。学校・教師に関する体系的な研究書や学会誌を概観すれば、堀尾輝久ほか編『講座学校』全7巻 (1995-1996)、日本教育経営学会編『講座日本の教育経営』全10巻 (1986-1987)・『シリーズ教育の経営』全6巻 (2000)、日本教育方法学会編『教育方法』(1966-)、日本教師教育学会編『日本教師教育学会年報』(1992-)は、運動部活動に関して、ほとんど論じていない。その理由は、運動部活動が教育課程外にあることと関連すると思われるが、教育学領域の中で運動部活動研究はきわめて周知的である。

こうした中でいくつかの研究は、運動部活動の教育的意義を指摘しながらも (山口編、1990, pp.160-173; 吉田、2009)、それ以上に、運動部活動が引き起こすさまざまな問題を指摘してきた。教育学の立場から総合的に行われた初めての運動部活動研究である今橋ほか編 (1987) は、生徒の権利を無視して加入が半ば義務付けられる問題点、過熱化する余り怪我・障害が後を絶たない問題点、教師の権利を無視して半ば校務として従事させられる問題点などを指摘した。これに続いて、運動部活動の過熱化、勝利至上主義、しごき・体罰、怪我・障害、他の教育活動への圧迫、教師の負担などの問題点が繰り返し指摘されてきた (城丸・水内、1991; 白井ほか編、1991, pp.127-153; 葉養編、1993, pp.185-194)。教育学領域の数少ない研究は、運動部活動に教育的意義を見いだす

と同時に、それを「教育問題」として扱ってきた。

2-2. 体育・スポーツ科学領域

体育・スポーツ社会学／心理学は「社会学／心理学領域」で、体育・スポーツ史は「歴史学領域」で後述するとし、それらを除いた体育・スポーツ科学領域の動向を見ておく。

体育・スポーツ科学領域も、教育学領域と同様に、運動部活動のさまざまな問題点を指摘してきた。体系的な研究書としては、浅見俊夫ほか編『現代体育・スポーツ体系』全30巻(1984)の第5巻「学校体育・スポーツ」(pp.57-58)が、運動部活動が過熱化し競技志向に偏りすぎることを問題視している。そうした過熱化や競技志向への偏りは、子どもの権利や主体性を損なう問題として(森川・遠藤、1989;内海、1998)、怪我・障害を引き起こす問題として(武藤・太田、1999)、強く批判され、その改善が繰り返し叫ばれてきた。さらに、こうした問題が生み出される背景として、教育システムとスポーツシステムに重なる運動部活動自体の構造も問題化された(久保、1998;中村、2009)。その解決策として「部活とクラブの協働」が提唱され、運動部活動を総合型地域スポーツクラブへ移行する道筋も示された(黒須編、2007)。教育でもありスポーツでもある運動部活動の位置づけが問題とされ、それを純粋なスポーツ組織として位置づけ直すことで問題の解消が目指されたわけである。

2-3. 社会学／心理学領域Ⅰ(参加・適応研究)

社会学(体育・スポーツ社会学や教育社会学を含む)と心理学(体育・スポーツ心理学や教育心理学を含む)は、その方法論や分析レベルに違いはあるが、かなりの程度類似するテーマに取り組んできた。そのためここでは、社会学／心理学領域として一端まとめた上で、Ⅰ.参加・適応研究、Ⅱ.機能・効果研究、Ⅲ.顧問教師研究に分ける。

参加・適応研究とは、どのような生徒がなぜ運動部活動へ参加・適応するのかを明らかにしよう

とした研究群である。まず、生徒の参加(継続)／不参加(退部・ドロップアウト・バーンアウト)を規定する要因やそのプロセスが、生徒の心理的諸相や社会背景的特徴に注目して検討されている(青木、1989;中込・岸、1991;稲地・千駄、2001;横田、2002;西島ほか、2002、2003;西島・中澤、2006、2007)。こうした運動部活動参加者の特徴の検討は、アメリカでも盛んであり、国レベルで無作為に抽出された大量のサンプルなどを元に、高度な統計的手法を用いた精緻な二次分析が重ねられている。そこでは、運動部活動参加に影響を与える要因として、生徒本人の達成感や人間関係、やりがいとコスト／ベネフィットの認識(Fredricks et al., 2002)、親の収入や学歴(Fejgin, 1994)、家族構成や文化資本(Eitle and Eitle, 2002)、などが指摘された。さらに、それらの影響を媒介する要因として、学校文化や価値風土(Snyder and Spreitzer, 1979; Thirer and Wright, 1985)、人種(Goldsmith, 2003)による違いも検討されてきた。

つぎに、運動部活動参加者を一括りにせず、参加者の中にある適応程度の差異に注目し、適応／不適応を規定する要因やそのプロセスについて検討した研究もある(杉本、1986;桂・中込、1990;青木・松本、1997;西島ほか、2000;青木、2003)。そしてこれらに関連して、運動部活動からの退部・ドロップアウト・バーンアウトそして不適応に影響を与えるストレス要因の特定や測定の見直しも進められてきた(渋谷・小泉、1999;渋谷・森、2002、2004;加藤・石井、2003;渋谷ほか、2008)。運動部活動への生徒のかかわりの全体を総括するに至ってはいないが、研究の蓄積は進んでいるといえる。

2-4. 社会学／心理学領域Ⅱ(機能・効果研究)

機能・効果研究とは、運動部活動への参加が、いかなる機能や効果を持っているのかを明らかにしようとした研究群である。その主要テーマは、人間形成や教育的・職業的・社会的達成に対する

運動部活動参加の機能・効果であった²⁾。ただし、明確な結論には未だ至っていない。

たしかに運動部活動参加が、それらに対してポジティブな機能・効果を持つ結果を示した研究は多い。日本では、「ライフスキル」の獲得（上野・中込、1998；上野、2006）、授業への積極性や学校への適応（吉村・坂西 1994；高旗ほか 1996；西島ほか 2000、2002、2003；藤田 2001；竹村ほか、2007）、それらを通じた学業達成（白松、1997）や社会移動（甲斐、2000）、などへのポジティブな影響が示された。アメリカでも、国レベルの無作為抽出による大量サンプルの二次分析などから、パーソナリティや精神の発達・安定（Schendel, 1965; Nicholson, 1979; Gore et al., 2001; Broh, 2002）、学業・進学への意欲とその達成（Eidsmoe, 1964; Rehberg and Schafer, 1968; Spreitzer and Pugh, 1973; Snyder and Spreitzer, 1977; Otto and Alwin, 1977; Marsh, 1993; Spreitzer, 1994; Crosnoe, 2001, 2002; Broh, 2002）、職業・収入や社会移動（Otto and Alwin, 1977; Melnick et al., 1992a）、非行・退学の予防（Landers and Landers, 1978; McNeal, 1995; Miller et al., 1998）、などへのポジティブな影響が示された³⁾。

しかし、その一方で、運動部活動参加が、人間形成や教育的・職業的・社会的達成に対してポジティブな機能・効果を持つとは限らないことを示した研究も少なくない（Hanks and Eckland, 1976; Feltz and Weiss, 1984; Best, 1985; Melnick et al., 1988; Rees et al., 1990; Melnick et al., 1992b; Spreitzer, 1994; Hanson and Kraus, 1998; Crosnoe, 2001）。さらに、運動部活動参加が、成績の低下（Landers et al., 1978）、性行動の促進（Miller et al., 1999）、反社会的な逸脱（岡田、2009）、といったネガティブな機能・効果を持つ場合もあることも示された。結局のところ、運動部活動参加が人間形成や教育的・職業的・社会的達成に対していかなる機能・効果を持つのかは、未だ明らかになっていないといえる⁴⁾。

2-5. 社会学／心理学領域Ⅲ（顧問教師研究）

上述の参加・適応研究と機能・効果研究は生徒に注目した研究群であるが、他方で、顧問教師に注目した研究群もある。まず、顧問教師はいかなる特徴を持っているかという、基本的な実態を調査した研究がある（宇土ほか、1969；村井、1978；西垣、1983；徳永・山下、2000；西島ほか、2008；中澤ほか、2009）。そこでの調査項目は、顧問教師の性・年代・担当教科といったデモグラフィックな特徴から、教育観や運動部活動への期待、負担感や抱える課題といった意識面の特徴、そして運営や指導へのかかわりの内容や程度といった行動面の特徴まで多様である。

つぎに、顧問教師の指導の実際に焦点を当てて、そのリーダーシップのとり方や指導観・指導意図・指導行動について検討した研究がある（松原、1990；小西・内藤、1993；北村ほか、2005）。加えて、そうした指導が成立するための前提となる教師－生徒関係について、顧問教師がどんな能力を持っているか、それを生徒がどう認知しているかといった観点から、検討が積み重ねられた（森ほか、1990；伊藤ほか、1992；伊藤、1994）。

最後に、顧問教師が自らの役割を巡って抱く葛藤について考察した研究がある。顧問教師の葛藤に関する研究は、アメリカで蓄積され、「教師役割」と「コーチ役割」の間に生じる役割間葛藤として定式化されてきた（Locke and Massengale, 1978；Sage, 1987, 1989；Figone, 1994；Chelladurai and Kuga, 1996）。こうしたアメリカの研究動向と同様に、日本でも、運動部活動における教育的／競技的空間の二重性が、顧問教師に葛藤を引き起こすことが指摘された（小谷・中込、2003、2008）。この葛藤は、運動部活動が教育であると同時にスポーツでもあること、そして顧問教師が教師であると同時にコーチでもあることから、生じるものである。その意味で、スポーツの教育の関係を考える上で、重要なテーマといえるだろう。

2-6. 歴史学領域

運動部活動の歴史は、それが教育課程外の活動であることと関連して、教育史領域ではほとんど触れられず、体育・スポーツ史領域で蓄積されてきた。まず運動部活動の戦前史は、通史研究によって、明治前半期に東京の高等教育機関で誕生し、その後、大正・昭和初期までに全国の中等教育機関に普及していったとまとめられている(竹之下、1950; 木下、1970; 世界教育史研究会編、1975; 竹之下・岸野、1983)。この誕生から普及に至るプロセスの詳細に迫りうる個別史は積み重ねられているが(渡辺、1967、1973; 加藤、1975; 入江、1986; 山本、1988; 加賀、1989; 中嶋、1993; 富岡、1994; 田代、1996; 清水、1998; 坂上、1998、2001; 石坂、2002; 中村、2007)、未だ不十分な点も多い。とりわけ普及プロセスの中心ともいえる、明治後半期から大正・昭和初期における中等教育機関の運動部活動の歴史が不十分である。戦前史でもっとも多くの研究が蓄積されたのは明治前半期の高等教育機関についてであるが、その後には続くはずの、明治後半期以降の中等教育機関の運動部活動の歴史研究は少ない。渡辺による旧制中学校校友会の体系的な研究(1978)以来、概史が述べられる他(渡辺、1997)、いくつかの事例研究があるに留まっている(真栄城・高木、1986; 真栄城・青野、1990; 鈴木・大櫃、1993; 阿部ほか、1998)。

つぎに運動部活動の戦後史は、通史研究(井上、1970; 木下、1970; 前川編、1973; 竹之下・岸野、1983)、戦後教育改革研究(木村、1969)、政策研究(関、1997; 内海、1998)で部分的に記述された。しかし、1970年代以降の現代史は未だ総括されておらず、またその方法論も政策史に限定される傾向があり、実践や議論の歴史も不十分である。戦後学校体育の実践と議論の変遷を扱った中村敏雄編『戦後体育実践論』全4巻(1997-1998)の中に、運動部活動を直接扱った論文はほとんど無い。戦前・戦後を通じて運動部活動の歴史像は、未だ不完全といえるだろう。

2-7. 日本研究 (Japanese studies) 領域

日本研究において、運動部活動は教育やスポーツの特殊なあり方として注目されてきた。日本研究は、日本の戦後復興と経済成長の原動力を日本の学校教育に見いだしてきたが、その中で、クラブや部活動の存在にも注目した(Vogel, 1979; Cummings, 1980; Rohlen, 1983)。またアメリカの文化人類学者・Miller (2011)は、日本のスポーツの特殊性として、教育を管轄する行政機関の文部(科学)省がスポーツを管轄している点⁵⁾や、スポーツクラブのほとんどが学校教育に属している点などを指摘している。海外の研究者から見れば、教育としてもスポーツとしても、運動部活動は特殊な存在であったといえる。

より詳細な調査研究を概観すれば、オーストラリアの社会学者・Light (2000、2008)は、東京の高校ラグビー部のフィールドワークから、運動部活動の儀礼的側面や男性性獲得の場としての機能を論じた。イギリスの文化人類学者・Cave (2004)は、関西地方の中学・高校部活動のフィールドワークから、文化部も含めた部活動の社会化機能や秩序形成機能を論じた。オーストラリアの社会学者・McDonald and Hallinan (2005)は、滋賀の大学ボート部のフィールドワークから、「精神」という言葉の意味づけを巡る日本的な身体観を論じた。アメリカの社会学者・Blackwood (2010)は、高校野球部のマネージャーの存在に注目しながら、ジェンダー秩序の再生産機能を論じた。

日本研究者の関心は運動部活動の歴史へも及び、アメリカの歴史学者・Roden (1980)は、明治期の第一高等学校の生活史を記述する中で野球部員の独特な生活スタイルにも触れた。また、先のBlackwood (2008)は、「武士道」や「野球道」という日本的なイデオロギーに焦点を当てながら明治期の学生野球の精神史を記述した。日本の運動部活動は、国際的な注目を浴びてきたといえるだろう。

3. 課題

3-1. 学校運動部活動の形成・拡大・維持過程の解明

以上の動向を踏まえて、運動部活動研究に残された課題として本稿で指摘したいのは、運動部活動そのものが歴史的にどう形成され、拡大してきたのか、そして現在、どう維持されているかという、その形成・拡大・維持過程の解明という課題である。

これまでの運動部活動研究は、それが成立していることを前提として、教育学／体育・スポーツ科学領域でその意義や問題が何度も強調され、社会学／心理学領域で参加・適応の仕組み、機能・効果、顧問教師の姿に関する考察が積み重ねられてきた。しかし、そうした研究は、運動部活動そのものがいかにして成立してきた／しているかを、まったくと言っていいほど論じていない。そのため、重要な教育的意義を持ち、多くの生徒が参加・適応し、種々の機能・効果を有しているはずの運動部活動を支えるために、いかなる条件が必要なのかを議論できない。そして、繰り返し叫ばれるさまざまな問題を抱えながら、またそれにかかわる顧問教師が負担・課題・葛藤を抱えながらも、なぜ運動部活動が成立し続けるのかを理解できないのである。先行研究が暗黙の内に前提としていた、運動部活動自体を成立させてきた／させている仕組みの解明、つまり、運動部活動の形成・拡大・維持過程の解明という課題は、運動部活動研究の大きな陥穽といえる。

他方で、歴史学領域においては、その形成・拡大過程について部分的に明らかにされてきた。しかし、それでもなお、明治後半期以降の通史は不完全であり、高等教育に比べて中等教育に関する検討が不十分であり、政策以外の側面の検討が不足しているという限界がある。最後に、日本研究においては、運動部活動の存在が日本特殊であるとして注目されてきた。これに対して、なぜ、どのようにそうした運動部活動が存在し得たのかという歴史的・文化的・社会的説明を、日本の社会科学は与えていない。

3-2. 運動部活動の成立自体の不思議さ

本稿が、運動部活動の形成・拡大・維持過程の解明を、取り組むべき課題として提出する理由は、これまでの運動部活動研究で取り組まれておらず、先行研究の前提を問い直すためというだけに留まらない。それは、すなわち、わが国で運動部活動がこれほど大規模に成立していること自体が端的に不思議であるからであり、その成立の背景と仕組みが、未だ十分に明らかになっていないからである。以下では、運動部活動の大規模な成立が不思議であるという根拠を、5つ述べる。

第1に、運動部活動が青少年のスポーツの中心的な場としてこれほど大規模に成立している国は、日本以外に無いからである。一連の比較体育・スポーツ研究は、世界各国の青少年スポーツや学校運動部活動の状況を記述してきた（文部省編、1968; Bennett et al, 1983; Weiss and Gould eds., 1986; Flath, 1987; Haag et al. eds, 1987; Wagner ed., 1989; De Knop et al. eds., 1996）。その詳細は次節であらためて検討するが、これらの研究から、青少年がスポーツを行う中心的な場所は学校ではなく地域社会であること、そして他国の運動部活動と比較して日本のそれがきわめて大規模であることがわかる⁶⁾。運動部活動が大規模に成立している日本は、国際的にきわめて特殊である。

第2に、運動部活動が教育課程外の活動だからである。運動部活動は、国際的に見て特殊な活動であるが、それは特殊な教育制度による産物ではない。運動部活動は、国が学習指導要領上で定めた教育課程には含まれない課外活動である。それゆえ、運動部活動を支える制度的な基盤はきわめて脆弱である。たとえば、部の設置は学校の任意であるため、顧問教師の異動などによってしばしば廃部される。指導計画は公式に用意されていないため、顧問教師に任されている。といっても、運動部活動の指導方法は教員養成課程に含まれていないため、経験の無い教員が手探りで指導に携わることも多い。また、そもそも責任の所在が不

明瞭であるため、学校教職員だけでなく、インフォーマルに地域住民や保護者の多様なかかわりが生じる。これらの事情を踏まえると、運動部活動は、制度と呼ぶにはあまりにも脆弱な基盤の上に成立しており、慣習と呼ぶ方が適切であるといえる。

第3に、運動部活動が成立するかどうか、生徒の意思よりも学校や教師の働きかけに大きく依存しているからである。脆弱な基盤の上にある運動部活動は、生徒に任せられ、生徒の意思によって成立しているように思われるが、実態はそうではない。仮に生徒が運動部活動に加入したいと思っても、学校や教師の協力がなければ、運動部活動は成立しない。顧問教師がいないと、日々の活動はもちろん、いわゆる公式大会に参加できないからである。たとえば、東京都内の公立中学校では、顧問教師の異動によって毎年300以上の部が廃部されている（東京都教育委員会 2007、pp.23-24）。教師の異動は、部活動を担当できるかどうかではなく教科を担当できるかどうかによって行われるため、顧問教師の異動は部活動の存廃に直接影響する。一方で、仮に生徒が運動部活動に加入したくないと思っても、教師が積極的に加入を薦めたり、加入を義務づけたりする学校は少なくない。文化庁も含めた場合では、公立中学校の38.4%が、生徒への部活動加入を義務づけているという調査結果もある（中澤ほか 2009）。つまり、生徒の意思があっても学校や教師の働きかけがなければ運動部活動は成立せず、逆に、生徒の意思がなくても学校や教師の働きかけがあれば運動部活動は成立している。

第4に、運動部活動を支える学校や教師は、少なからぬ負担を被っているからである。学校や教師の働きかけによって運動部活動は成立しているが、それが課外活動であることから、学校が部活動を引き受けるべきかどうかはあいまいであり、教師が部活動に従事すべきかどうかはあいまいである。それゆえ、学校にとっては財政上の問題や顧問配置の問題が、教師にとっては超過勤務の問

題や手当の問題がある。そのため日本教職員組合は、部活動が教員の負担になっていることを問題視し、1970年代から、教員手当を要求しながら、運動部活動は学校と教師が担うべき活動ではなく社会体育に属する活動だと主張してきた。学校と教師は少なからぬ負担を被りながら、それでも運動部活動を成り立たせるために働きかけているわけである。

第5に、これまでに運動部活動を地域社会へ移行させようと試みられてきたからである。学校と教師の負担を軽減するため、運動部活動の地域社会への移行が何度か試みられてきた。たとえば、1962年に日本体育協会が設立した「スポーツ少年団」は、運動部活動のオルタナティブとして期待された。だが、中学・高校段階での加入率は低迷し続け、運動部活動のオルタナティブにはなり得ていない。また、1970年代には日本教職員組合の教員手当要求を発端として、一部の自治体では一時的に運動部活動を社会体育化する動きが出てきた。だが、結局は行き詰まりをみせた。さらに、1980年代後半からの教育の自由化、学校のスリム化という現在に続く政策的流れの中で、運動部活動の地域社会への移行が目指されている。しかし、大竹・上田(2001)、夏秋(2003)、高村・高橋(2006)などが報告する一部の先進事例を除き、大局的に見れば運動部活動は学校に留まり続けており、運動部活動の地域社会への移行は、ことごとく失敗してきたといえる。

以上を踏まえると、運動部活動が成立してきた／していること自体が不思議といえる。海外では見られないにもかかわらず、教育課程外の活動であるにもかかわらず、生徒の意思があるかどうかにかかわらず、学校と教師が負担を被るにもかかわらず、地域社会への移行が試みられてきたのにもかかわらず、運動部活動は成立してきた／しているのである。なぜなのか。この問いに、先行研究は答えられない。運動部活動の形成・拡大・維持過程は、解明すべき課題として残されている⁷⁾。

4. 展望

4-1. 青少年スポーツの国際状況

本稿が提出した課題である運動部活動の形成・拡大・維持過程の解明を通して、いったい何が展望できるのか。最後に、運動部活動研究の展望を、スポーツと教育の日本特殊的関係の探求という方向で切り開いてみたい。ここでは、その準備作業として、青少年スポーツの国際状況と運動部活動の日米英比較を試論する。

まず、青少年スポーツの国際状況である。各国の青少年はどこでスポーツを行っているのか。表1は、一連の比較体育・スポーツ研究を元にして、世界34カ国における中等教育段階のスポーツの場を、「学校中心型」「学校・地域両方型」「地域中心型」に類型化したものである。典拠文献の発行年がやや古く、記述内容の質と量が十分とは言えない国もあるため、留意は必要であるが、青少年スポーツのおおよその国際状況を知ることはできる。これを見ると、運動部活動と地域クラブの双方が存在する「学校・地域両方型」が、欧州の大部分や北米を中心に20カ国でもっとも多い。ただし、その内のほとんどの国では、運動部活動が存在するものの、地域クラブの方が規模が大きく活動も活発である。つぎに、運動部活動ではなく地域クラブを主とする「地域中心型」は、ドイツやスカンジナビア諸国など9カ国である。このように運動部活動がほとんど存在しない国も、珍しくない。そして、運動部活動を主とする「学校中

心型」の国は、日本を含むアジア5カ国ともっとも少ない。ただし、日本以外の4カ国が「学校中心型」に属する理由は、地域社会のスポーツが未発達なためである。これらの国では、たとえば中国や韓国の運動部活動がわずか一握りのエリートのみしか参加していないように、運動部活動そのものの規模は日本と比較して小さい。青少年のスポーツの中心が運動部活動にあり、かつ、それが大規模に成立している日本は、国際的に特殊であることがわかる。

では、運動部活動を基盤とした学校間対抗スポーツについてはどうか。表2は、Saunders (1987, p.117) が調査した、アジア・環太平洋地域22カ国の中等教育における学校間対抗スポーツの状況である。調査項目は「実施状況」「生徒の参加率」「種目数」「連盟の数」「全国／地区大会」である。この表を見ると、学校間対抗スポーツのそもそもの有無、そして種類や規模は、各国で多様である。その中で日本は、学校間対抗スポーツの機会が「すべての学校」で用意され、「21%の生徒」がその機会を享受し、「30のスポーツ」が提供され、「30の学校スポーツ連盟」がそれを支援し、全国／地区大会が「有る」。「30のスポーツ」「30の学校スポーツ連盟」という数は、この表でもっとも多い数である⁸⁾。運動部活動を基盤とした学校間対抗スポーツの状況を見ても、日本のそれが他国と比較して規模が大きく、盛んであることがわかる。

表1. 各国の中等教育段階のスポーツの場に関する類型

学校中心型	学校・地域両方型		地域中心型
日本	ブラジル	ポーランド	ドイツ
中国	カナダ	ソ連 (現ロシア)	スイス
韓国	アメリカ	イスラエル	デンマーク
台湾	イングランド	エジプト	フィンランド
フィリピン	スコットランド	ボツワナ	ノルウェー
	ベルギー	ナイジェリア	スウェーデン
	オランダ	ケニア	イエメン
	フランス	オーストラリア	ザイール (現コンゴ)
	スペイン	ニュージーランド	タイ
	ポルトガル	マレーシア	

(注) 文部省編 (1968)、Bennett et al. (1983)、Weiss and Gould eds. (1986)、Flath (1987)、Haag et al. eds. (1987)、Wagner ed. (1989)、De Knop et al. eds. (1996) などの比較研究等を元にして、筆者作成。

表 2. 各国の中等教育における学校間対抗スポーツの状況

国	実施状況	生徒の参加率	種目の数	連盟の数	全国／地区大会
オーストラリア	ほとんどの学校	58%	12-18	12-17	有
バングラディシュ	ほとんど無し	10-15%	5-6	5-6	有
中国	約半分	5%	5	5	有
インド	ほとんどの学校	3%	10	10	有
インドネシア	ほとんどの学校	30%	8	8	有
イラン	すべての学校	10-15%	12	12	有
日本	すべての学校	21%	30	30	有
韓国	ほとんどの学校	5%	10	10	有
マレーシア	すべての学校	20%	16	16	有
モルジブ	無し	0%	0	0	無
モンゴル	すべての学校	60%	12	12	有
ネパール	ほとんど無し	10%	3	0	有
ニュージーランド	ほとんどの学校	30%	20	10	有
パプア・ニューギニア	ほとんどの学校	20%	6	1	無
フィリピン	約半分	10%	5	0	無
シンガポール	すべての学校	80%	18	18	有
スリランカ	ほとんどの学校	10%	24 以上	18	有
タイ	ほとんどの学校	30%	4-5	不明	有
トンガ	ほとんどの学校	40%	6	6	有
トルコ	ほとんどの学校	30%	9	9	有
ソ連	すべての学校	25-30%	不明	不明	有
西サモア	すべての学校	80%	5	5	有

(注) Saunders (1987, p.117) から日本語に訳して引用。Saunders は、アジア・環太平洋地域の各国のユネスコ委員会 (national UNESCO commissions) を対象に、郵送での質問紙調査を実施した。

4-2. 運動部活動の日米英比較

つぎに、日米英比較である。アメリカとイギリスにも運動部活動は存在しており、両国は、運動部活動が活発な代表的な国である。世界史的に見ても、運動部活動の起源は、18世紀末から19世紀前半におけるイギリスのパブリックスクールにあり、それが大きく広がりを見せたのが、19世紀末から20世紀初頭にかけてのアメリカであった。さらに、両国の運動部活動は、日本の運動部活動にとって、明治導入期や戦後改革期のモデルでもあった。では、日米英の運動部活動には、どんな違いがあるのか。表3は、一連の比較体育・スポーツ研究および各国の実態調査報告書等を元に、日米英における中学・高校運動部活動の諸特徴を「設置学校の割合」「各学校の部数」「生徒の加入率」「活動状況」「全国大会」「指導者」「指導目的」の観点から整理したものである。

順に見ていくと、三カ国ともほぼすべての学校に運動部活動が設置されている。日本とイギリスでは、多数の部を持つ学校が一般的である。対してアメリカでは、アメリカンフットボールやバス

ケットボールなどの代表的な少数の部だけを持つ学校が珍しくない。また入部に際してトライアウトを設けて、競技能力により入部希望者を選抜する場合もある。生徒の加入率は、日本が約50%~70%で高く、イギリスが約50%で続く。アメリカは、ほとんど参加しない名目的な部員も含めた加入率は50%に達するが、それらを除いた実質的な割合は30~40%であり、やや低い。活動状況は、日本とアメリカは活発で高度に組織化されている。ただし、アメリカはシーズン制を敷いており年間を通して活動しているわけではない。対してイギリスは、参加生徒の多くは週1~2日気晴らし程度に活動するに過ぎず、活発とはいえない。全国大会は、日本とイギリスで有るが、国土の広いアメリカでは無く、州レベルの大会で留まっている。ただし、アメリカの高校のアメリカンフットボールやバスケットボールの州大会は、多くの観客を集めるビッグ・イベントである。指導者は、関心や経験の有る教師が担う点は、三カ国とも共通している。違いは、アメリカで教師とは別に雇われる専門のコーチも担当する点、日本で関心や経験

の無い教師も担当する点である。そうした指導者の違いに関連し、指導目的にも違いが見られる。アメリカとイギリスの指導者は競技力向上を挙げるのに対して、日本では第一に人間形成を挙げる。

これらを踏まえて、日米英の運動部活動の総括的特徴を対比的に述べると、日本は「一般生徒の教育活動」、アメリカは「少数エリートの競技活動」、イギリスは「一般生徒のレクリエーション」として、まとめることができるだろう。

以上、運動部活動の国際状況を概観することで、スポーツと教育の日本特殊的関係が見えてくる。多くの国で、スポーツは学校教育を離れて成立していた。また運動部活動が存在するアメリカとイ

ギリスにおいても、教育活動というよりも、競技活動やレクリエーションとして存在していた。このように日本以外では、スポーツと教育は、互いに無関係あるいはその結びつきが弱いのが一般的である。しかし、対照的に日本では、学校と教師が、一見すると教育と無関係に思われるスポーツを、教育活動として大規模に編成している。つまり、スポーツと教育が互いに密接に関連し、その結びつきが強いという、われわれにとって馴染み深い実態は、日本特殊的なのである。こうしたスポーツと教育の日本特殊的関係は、いったいなぜ、どのように構築されるのか。その探求が、運動部活動研究を通じて展望できるように思われる。

表 3. 日米英における中学・高校運動部活動の諸特徴

	日本	アメリカ	イギリス
設置学校の割合	ほぼすべての学校	ほぼすべての学校	ほぼすべての学校
各学校の部数	多数	少数（トライアウト制）	多数
生徒の加入率	約 50%～70%	約 30%～50%	約 50%
活動状況	活発	活発（シーズン制）	不活発
全国大会	有	無	有
指導者	教師（関心や経験の無い教師を含む）	教師とコーチ	教師
指導目的	人間形成	競技力向上	競技力向上
総括的特徴	一般生徒の教育活動	少数エリートの競技活動	一般生徒のレクリエーション

(注) 文部省編 (1968)、Bennett et al. (1983)、Weiss and Gould eds. (1986)、Flath (1987)、De Knop et al. eds. (1996) などの比較研究、および、運動部活動の実態に関する調査研究協力者会議 (2002)、National Center for Education Statistics (2005)、Sport England (2001) などの各国の実態調査報告書等を元に、筆者作成。

注

- 1) 運動部活動は、日本で「課外体育」「課外クラブ」「選択クラブ」などと呼ばれ、アメリカで「extracurricular sports activity」「school athletics」「interscholastic sports」「varsity sports」などと呼ばれてきた。本稿はこれらを含みながら、運動部活動や、学校教育活動の一環として児童・生徒・学生が放課後や休日に行う組織的・継続的な課外スポーツ活動と定義する。また、アメリカでは、学校内/外の区別に応じて、intramural sports/extramural sports という言葉の使い分けもされてきた。この使い分けは、日本で言うと、体育祭・球技大会・課程内クラブ/学校間対抗スポーツ、という区分に対応するといえる。これを踏まえると、日本の運動部活動は、課程内クラブ活動と密接な関係を持っていたことから intramural sports の側面を持ち、学校代表の学校間対抗スポーツと不可分であることから extramural sports の側面も持つといえるかもしれない。
- 2) 他のテーマとしては、ハビトゥスの形成・再生産の機能 (松尾、2001)、ジェンダー秩序の再生産の機能 (羽田野、2004)、小集団研究の文脈での集団機能 (竹村・丹羽、1966; 丹羽、1967; 佐藤、1974; 金、1992)、なども研究されてきた。
- 3) さらに、そうした影響のジェンダー・人種による違いや、影響を媒介する価値風土の分析も進められてきた (Spady, 1970; McElroy, 1979; Sabo et al., 1993; Tracy and Erkut, 2002)。
- 4) このように、「スポーツは望ましい人間をつくる」という古くして新しい仮説の検証は済んでいない。この状況に対して、

- 変数の測定精度を高めようとする心理学者がいるが (竹之内ほか、2002)、一方でそれは神話に過ぎないと懐疑する社会学者もいる (Miracle and Rees, 1994)。
- 5) Miller (2011, p.172) がまとめた、各国のスポーツを管轄する行政機関の英語表記一覧を表 4 に示した。これを見ると、日本以外の国は、文化/メディア/若者/健康/老化/伝統/ツーリズムという言葉とスポーツを関連づけている。これに対して日本では、文化という言葉以外に、教育/科学/技術という言葉ともスポーツを関連づけており、特徴的である。
 - 6) これに関連して比較教育学においても、ヨーロッパ大陸やラテンアメリカの学校では、部活動のような課外活動はほとんどないことが指摘されてきた (二宮、2006, pp.8-31)。
 - 7) 筆者はこれまで、この運動部活動の形成・拡大・維持過程の解明というテーマについて、A. 戦前の形成過程に関しては、東京帝国大学運動会の事例研究 (中澤、2008a)、B. 戦後の拡大過程に関しては、実態・政策・議論の変遷 (中澤、2011a、2011b)、日本教職員組合の見解 (中澤、2011c・近刊)、C. 現在の維持過程に関しては、学校と保護者の関係 (2008b、2008c)、顧問教師の意味づけ方 (中澤、2011d・近刊)、などの分析を通じて取り組んできた。
 - 8) ただし、生徒の参加率が 21% というのは、シンガポールの 80% やモンゴルの 60% に比べれば低い。これは、日本では大会以前のそもそもの活動への加入率が非常に高いため、そこから選ばれた少数のエリートのみしか大会へ選出されないことを示していると思われる。このように大衆化と競技化が混交した点が、日本の運動部活動の特徴ともいえる。

表 4. 各国のスポーツを管轄する行政機関

国	国のスポーツ政策を管轄する政府組織／個人
イングランド	Department for Culture, Media and Sport
フランス	Minister of Youth Affairs and Sport
イタリア	Agency for Cultural Heritage and Activities
スウェーデン	Ministry of Culture
デンマーク	Ministry of Culture
オーストラリア	Department of Health and Aging
ニュージーランド	Ministry for Culture and Heritage
韓国	Ministry of Culture, Sport and Tourism
日本	Ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technology

(注) Miller (2011, p.172) より一部を日本語に訳して引用。

日本語文献

- 青木邦男 (1989) 「高校運動部員の部活動継続と退部に影響する要因」『体育学研究』34 (1)、pp.89-100.
- 青木邦男 (2003) 「高校運動部員のスポーツ観とそれに関連する要因」『体育学研究』48 (2)、pp.207-223.
- 青木邦男・松本耕二 (1997) 「高校運動部員の部活動適応感に関連する心理社会的要因」『体育学研究』42 (4)、pp.215-232.
- 浅見俊夫ほか編 (1984) 『現代体育・スポーツ体系』講談社。
- 阿部生雄・寶學淳郎・中塚義美・柳根直・孫煥・秋元忍・山本英作・後藤光将・池原知也・細江順・田原貴子・美山治 (1998) 「東京高等師範学校附属中学校における課外体育活動の歴史」『筑波大学体育科学系紀要』21、pp.109-130.
- 石坂友司 (2002) 「学歴エリートの誕生とスポーツ」『スポーツ社会学研究』10、pp.60-71.
- 伊藤豊彦 (1994) 「コーチの社会的勢力の効果に及ぼす選手の個人特性の影響」『体育学研究』39 (4)、pp.276-286.
- 伊藤豊彦・豊田一成・遠投俊郎・森恭 (1992) 「コーチのリーダーシップ行動と社会的勢力の認知との関係」『スポーツ心理学研究』19 (1)、pp.18-25.
- 稲地裕昭・千駄忠至 (2001) 「中学生の運動部活動における退部に関する研究」『体育学研究』37 (1)、pp.55-68.
- 井上一男 (1970) 『学校体育制度史 増補版』大修館書店。
- 今橋盛勝・林量叔・藤田昌士・武藤芳照編 (1987) 『スポーツ「部活」』草土文化。
- 入江克己 (1986) 『日本ファシズム下の体育思想』不味堂出版。
- 上野耕平 (2006) 「運動部活動への参加による目標設定スキルの獲得と時間的展望の関係」『体育学研究』51 (1)、pp.49-60.
- 上野耕平・中込四郎 (1998) 「運動部活動への参加による生徒のライフスキル獲得に関する研究」『体育学研究』43 (1)、pp.33-42.
- 内海和雄 (1998) 『部活動改革』不味堂出版。
- 宇土正彦・八代勉・青木真 (1969) 「運動クラブの顧問活動に関する一考察」『東京教育大学体育学部紀要』8、pp.51-60.
- 運動部活動の実態に関する調査研究協力者会議 (2002) 『運動部活動の実態に関する調査研究報告書』。
- 大竹弘和・上田幸夫 (2001) 「地域スポーツとの『融合』を通じた学校運動部活動の再構成」『日本体育大学紀要』30 (2)、pp.269-277.
- 岡田有司 (2009) 「部活動への参加が中学生の学校への心理社会的適応に与える影響」『教育心理学研究』57 (4)、pp.419-431.
- 甲斐健人 (2000) 「高校部活の文化社会学的研究」南窓社。
- 加賀秀雄 (1989) 「わが国における1932年の学生野球の統制について」『北海道大学教育学部紀要』51、pp.1-16.
- 桂和仁・中込四郎 (1990) 「運動部活動における適応感を規定する要因」『体育学研究』35 (2)、pp.173-185.
- 加藤橋夫 (1975) 「野球統制の問題」『体育の科学』25 (9)、pp.613-615.
- 加藤久・石井源信 (2003) 「中学生サッカー選手の日常的な心理的ストレス反応に関する研究」『スポーツ心理学研究』30 (2)、pp.9-26.
- 北村勝朗・齋藤茂・永山貴洋 (2005) 「優れた指導者はいかにして選手とチームのパフォーマンスを高めるのか？」『スポーツ心理学研究』32 (1)、pp.17-28.
- 木下秀明 (1970) 『スポーツの近代日本史』杏林書院。
- 木村吉次 (1969) 「課外体育と体育管理上の問題」海後宗臣監修『戦後日本の教育改革7』東京大学出版会、pp.470-495.
- 金明秀 (1992) 「運動部における集団規範の研究」『スポーツ心理学研究』19 (1)、pp.11-17.
- 久保正明 (1998) 『コーチング論序説』不味堂書店。
- 黒須充編 (2007) 『総合型地域スポーツクラブの時代 1 部活とクラブの協働』創文企画。
- 小谷克彦・中込四郎 (2003) 「運動部活動において指導者が遭遇する葛藤の特徴」『スポーツ心理学研究』30 (1)、pp.33-46.
- 小谷克彦・中込四郎 (2008) 「運動部指導者の葛藤生起パターンごとに見られる対人関係の中での自己知覚の特徴」『スポーツ心理学研究』35 (2)、pp.1-14.
- 小西哲也・内藤勇次 (1993) 「部活動の効果的運営」『日本特別活動学会紀要』1、pp.53-62.
- 坂上康博 (1998) 『権力装置としてのスポーツ』講談社。
- 坂上康博 (2001) 『につばん野球の系譜学』青弓社。
- 佐藤裕 (1974) 「スポーツ集団の力学と人間関係」『体育社会学研究』3、pp.103-133.
- 渋谷崇行・小泉昌幸 (1999) 「高校運動部員用ストレス反応尺度の作成」『スポーツ心理学研究』26 (1)、pp.19-28.
- 渋谷崇行・森恭 (2002) 「高校運動部員の部活動ストレスサーに対するコーピング採用とストレス反応との関連」『スポーツ心理学研究』29 (2)、pp.19-30.
- 渋谷崇行・森恭 (2004) 「高校運動部員の心理的ストレス過程に関する検討」『体育学研究』49 (6)、pp.535-545.
- 渋谷崇行・西田保・佐々木万丈 (2008) 「高校運動部員の部活動ストレスサーに対する認知的評価尺度の再構成」『体育学研究』53 (1)、pp.147-158.
- 清水諭 (1998) 『甲子園のアルケオロジー』新評論。
- 白井慎・西村誠・川口幸宏編 (1991) 『特別活動』学文社。
- 白松賢 (1997) 「高等学校における部活動の効果に関する研究」『日本教育経営学会紀要』39、pp.74-88.
- 城丸章夫・水内宏編 (1991) 『スポーツ部活はいま』青木書店。
- 杉本厚夫 (1986) 「中学・高校運動部員における社会的アンビバレンスの変容」『体育学研究』31 (3)、pp.197-212.
- 鈴木敏夫・大権敬史 (1993) 「明治期中学校におけるスポーツの隆盛」『北海道体育学研究』28、pp.1-12.
- 世界教育史研究会編 (1975) 『世界教育史体系 31 体育史』講談社。
- 関春南 (1997) 『戦後日本のスポーツ政策』大修館書店。
- 高旗正人・北神正行・平井安久 (1996) 「中学生の『向学校性』に関する調査研究」『岡山大学教育学部研究集録』102、pp.249-258.
- 高村梨江・高橋豪仁 (2006) 「学校運動部と地域スポーツクラブの融合」『奈良教育大学紀要』55 (1)、pp.165-175.
- 竹之下休蔵 (1950) 『体育五十年』時事通信社。
- 竹之下休蔵・岸野雄三 (1983) 『近代日本学校体育史』日本図書センター。
- 竹之内隆志・田口多恵・奥田愛子 (2002) 「中学・高校運動選手の自我発達を測定する文章完成テスト 12 項目版の作成」『スポーツ心理学研究』29 (1)、pp.9-20.
- 竹村昭・丹羽劭昭 (1966) 「運動部のモラルの研究 (1)」『体育学研究』12 (2)、pp.77-83.
- 竹村明子・前原武子・小林稔 (2007) 「高校生におけるスポーツ系部活参加の有無と学業の達成目標および適応との関係」『教育心理学研究』55 (1)、pp.1-10.
- 田代正之 (1996) 「中学校野球の動向からみた『野球統制令』の歴史的意義」『スポーツ史研究』9、pp.11-26.
- 徳永敏文・山下立次 (2000) 「中学校運動部活動に関する調査」『岡山大学教育学部研究集録』115、pp.87-99.
- 富岡勝 (1994) 「旧制高校における寄宿舎と『校友会』の形成」『京都大学教育学部紀要』40、pp.237-246.
- 東京都教育委員会 (2007) 『部活動顧問ハンドブック』東京都教育庁指導部指導企画課。
- 中込四郎・岸順治 (1991) 「運動選手のバーンアウト発症機序に関する事例研究」『体育学研究』35 (4)、pp.313-323.
- 中澤篤史 (2008a) 「大正後期から昭和初期における東京帝国大学運動会の組織化過程」『体育学研究』53 (2)、pp.315-328.

- 中澤篤史 (2008b) 「運動部活動改革への保護者のかかわりに関する社会学的考察」『スポーツ科学研究』5, pp.79-95.
- 中澤篤史 (2008c) 「部活動の処遇における学校と保護者の相互行為」『学校教育研究』23, pp.130-143.
- 中澤篤史 (2011a) 「学校運動部活動の戦後史 (上)」『一橋社会科学』3, pp.25-46.
- 中澤篤史 (2011b) 「学校運動部活動の戦後史 (下)」『一橋社会科学』3, pp.47-73.
- 中澤篤史 (2011c・近刊) 「学校運動部活動のあり方に関する日本教職員組合の見解に関する考察」『教育と社会』研究』21, ページ数未定.
- 中澤篤史 (2011d・近刊) 「なぜ教師は運動部活動へ積極的にかかわり続けるのか」『体育学研究』56 (2), ページ数未定.
- 中澤篤史・西島央・矢野博之・熊谷信司 (2009) 「中学校部活動の指導・運営の現状と次期学習指導要領に向けた課題に関する教育社会学的研究」『東京大学大学院教育学研究科紀要』48, pp.317-337.
- 中嶋健 (1993) 「昭和初期文部省の『国民体育』政策の展開過程について」『体育史研究』10, pp.43-61.
- 中村哲也 (2007) 「『野球統制令』と学生野球の自治」『スポーツ史研究』20, pp.81-94.
- 中村敏雄 (2009) 『中村敏雄著作集4 部活・クラブ論』創文企画.
- 中村敏雄編 (1997-1998) 『戦後体育実践論』創文企画.
- 夏秋英房 (2003) 「愛知県半田市の総合型地域スポーツクラブの展開と運動部活動」『生涯学習研究』1, pp.15-24.
- 西垣完彦 (1983) 「高等学校の運動部顧問教師の生活と意識」『体育・スポーツ社会学研究』2, pp.95-131.
- 西島央・藤田武志・矢野博之・荒川英央・羽田野慶子 (2000) 「中学校生活と部活動に関する社会学的研究」『東京大学大学院教育学研究科紀要』39, pp.137-163.
- 西島央・藤田武志・矢野博之・荒川英央 (2002) 「移行期における中学校部活動の実態と課題に関する教育社会学的考察」『東京大学大学院教育学研究科紀要』41, pp.155-187.
- 西島央・藤田武志・矢野博之・荒川英央・中澤篤史 (2003) 「部活動を通してみる高校生活に関する社会学的研究」『東京大学大学院教育学研究科紀要』42, pp.99-129.
- 西島央・中澤篤史 (2006) 「中学校部活動の制度的変化と『活動参加状況』に関する教育社会学的考察」『東京大学大学院教育学研究科紀要』45, pp.49-66.
- 西島央・中澤篤史 (2007) 「静岡県の高校部活動における制度的変化と『活動参加状況』に関する教育社会学的考察」『東京大学大学院教育学研究科紀要』46, pp.99-120.
- 西島央・矢野博之・中澤篤史 (2008) 「中学校部活動の指導・運営に関する教育社会学的考察」『東京大学大学院教育学研究科紀要』47, pp.101-130.
- 二宮皓編 (2006) 『世界の学校』学事出版.
- 日本教育方法学会編 (1966) 『教育方法』明治図書出版.
- 日本教育経営学会編 (1986-1987) 『講座日本の教育経営』ぎょうせい.
- 日本教育経営学会編 (2000) 『シリーズ教育の経営』玉川大学出版部.
- 日本教師教育学会編 (1992) 『日本教師教育学会年報』日本教育新聞社.
- 丹羽劭昭 (1968) 「運動部員の成員性検査の作成」『体育学研究』13 (1), pp.13-20.
- 羽田野慶子 (2004) 「〈身体的な男性優位〉神話はなぜ維持されるのか」『教育社会学研究』75, pp.105-125.
- 葉養正明編 (1993) 『新特別活動の研究』紫峰図書.
- 藤田武志 (2001) 「中学校部活動の機能に関する社会学的考察」『学校教育研究』16, pp.186-199.
- 堀尾輝久ほか編 (1995-1996) 『講座学校』柏書房.
- 前川峯雄編 (1973) 『戦後学校体育の研究』不味堂出版.
- 真栄城勉・高木儀正 (1986) 「愛媛県における近代学校スポーツの発展過程」『琉球大学教育学部紀要』第二部 29, pp.179-190.
- 真栄城勉・青野聡 (1990) 「愛媛県における近代学校スポーツの発展過程 (2)」『琉球大学教育学部紀要』第一部・第二部 37, pp.253-260.
- 松尾哲矢 (2001) 「スポーツ競技者養成の〈場〉とハビトウス形成」『体育学研究』46 (6), pp.569-586.
- 松原敏浩 (1990) 「部活動における教師のリーダーシップ・スタイルの効果」『教育心理学研究』38(3), pp.312-319.
- 武藤芳照・太田美穂編 (1999) 『けが・故障を防ぐ 部活指導の新視点』ぎょうせい.
- 村井健祐 (1978) 「高校運動部指導者の意識と方法」『スポーツ心理学研究』5 (1), pp.29-39.
- 森恭・伊藤豊彦・豊田一成・遠藤俊郎 (1990) 「コーチの社会的勢力の基盤と機能」『体育学研究』34 (4), pp.305-316.
- 森川貞夫・遠藤節昭編 (1989) 『必携スポーツ部活動ハンドブック』大修館書店.
- 文部省編 (1968) 『外国における体育・スポーツの現状』文部省.
- 山口満編 (1990) 『特別活動と人間形成』学文社.
- 山口泰雄・池田勝 (1987) 「スポーツの社会化」『体育の科学』37 (2), pp.142-148.
- 山本清洋 (1987) 「子どもスポーツに関する社会化研究の現状と課題」『体育・スポーツ社会学研究』6, pp.27-49.
- 山本徳郎 (1988) 「体育やスポーツの科学化・合理化が意味していたもの」『体育・スポーツ評論』3, pp.93-112.
- 横田匡俊 (2002) 「運動部活動の継続及び中途退部にみる参加動機とバーンアウトスケールの変動」『体育学研究』47 (5), pp.427-437.
- 吉田浩之 (2009) 『部活動と生徒指導』学事出版.
- 吉村斉・坂西友秀 (1994) 「学校生活への満足度と部活動との関係 (2)」『埼玉大学紀要 (教育学部) 教育科学』43 (1-2), pp.53-68.
- 渡辺誠三 (1997) 「中学校における部活動の発祥と位置づけ」『日本特別活動学会紀要』6, pp.35-47.
- 渡辺融 (1967) 「東京大学開設当時における体育とスポーツに関する一考察」『体育学紀要』1, pp.1-7.
- 渡辺融 (1973) 「F. W. ストレンジ考」『体育学紀要』7, pp.7-22.
- 渡辺融 (1978) 「明治期の中学校におけるスポーツ活動」『体育学紀要』12, pp.1-22.

英語文献

- Best, C.(1985)"Differences in social value between athletes and nonathletes", *Research quarterly for exercise and sport*, 56(4), pp.366-369.
- Bennett, B. L., Howell, M. L. and Simri, U.(1983)*Comparative physical education and sport* (second edition), Lea & Febiger.
- Blackwood, T.(2008)"Bushido baseball?", *Social science Japan journal*, 11(2), pp.223-240.
- Blackwood, T.(2010)Playing baseball/playing 'house'", *Sport, education and society*, 15(1), pp.83-101.
- Broh, B. A.(2002)"Linking extracurricular programming to academic achievement", *Sociology of education*, 75(1), pp.69-95.
- Cave, P.(2004)"Bukatsudo", *The journal of Japanese studies*, 30 (2), pp.383-415.
- Chelladurai, P. and Kuga, D. J.(1996)"Teaching and Coaching", *Quest*, 48(4), pp.470-485.
- Coakley, J. J.(2003)*Sports in society*, 8th edition, international edition, McGraw-Hill.
- Crosnoe, R.(2001)"The social world of male and female athletes in high school", *Sociological studies of children and youth*, 8, pp.89-110.
- Crosnoe, R.(2002)"Academic and health-related trajectories in adolescence", *Journal of health and social behavior*, 43(3), pp.317-335.
- Cummings, W.(1980)*Education and equality in Japan*, Princeton University press.
- De Knop, P., Engstrom, L. M., Skirstad, B. and Weiss, M. R. eds.(1996)*Worldwide trends in youth sport*, Human kinetics publisher.
- Eidsmoe, R. M.(1964)"High school athletes are brighter", *Journal of health, physical education and recreation*, 35(5), pp.53-54.
- Eitle, T. M. and Eitle, D. J.(2002)"Race, cultural capital, and the educational effects of participation in sports", *Sociology of education*, 75(2), pp.123-146.
- Eitzen, D. S. and Sage, G. H.(2009)*Sociology of North American sport* (8th edition), Paradigm publishers.
- Fejgin, N.(1994)"Participation in high school competitive sports", *Sociology of sport journal*, 11(3), pp.211-230.
- Feldman, A. F. and Matjasko, J. L.(2005)"The role of school-based extracurricular activities in adolescent development", *Review of educational research*, 75(2), pp.159-210.
- Feltz, D. L. and Weiss, M. R.(1984)"The impact of girls' interscholastic sport participation on academic orientation", *Research quarterly for exercise and sport*, 55(4), pp.332-339.

- Figone, A. J. (1994) "Teacher-Coach Role Conflict", *The physical educator*, 51 (1), pp.29-34.
- Flath, A. W. (1987) "Comparative physical education and sport", 『体育学研究』 31 (4), pp.257-262.
- Fredricks, J. A., Alfeld-Liro, C. J., Hruda, L. Z., Eccles, J. S., Patrick, H. and Ryan, A. M. (2002) "A qualitative exploration of adolescents' commitment to athletics and the arts", *Journal of adolescent research*, 17(1), pp.68-97.
- Gore, S., Farrell, F. and Gordon, J. (2001) "Sport involvement as protection against depressed mood", *Journal of research on adolescence*, 11(1), pp.119-130.
- Goldsmith, P. A. (2003) "Race relationship and racial patterns in school sports participation", *Sociology of sport journal*, 20(2), pp.147-171.
- Haag, H., Kayser, D. and Benett, B. L. eds. (1987) *Comparative physical education and sport* (volume 4), Human kinetics publisher.
- Hanks, M. P. and Eckland, B. K. (1976) "Athletics and social participation in the educational attainment process", *Sociology of education*, 49(4), pp.271-294.
- Hanson, S. L. and Kraus, R. S. (1998) "Women, sports, and science", *Sociology of education*, 71(2), pp.93-110.
- Holland, A. and Andre, T. (1987) "Participation in extracurricular activities in secondary school", *Review of educational research*, 57(4), pp.437-466.
- Landers, D. M. and Landers, D. M. (1978) "Socialization via interscholastic athletics", *Sociology of education*, 51(4), pp.299-303.
- Landers, D. M., Feltz, D. L., Obermeier, G. E. and Brouse, T. R. (1978) "Socialization via interscholastic athletics", *Research quarterly*, 49(4), pp.475-483.
- Light, R. (2000) "From the profane to the sacred", *International review for the sociology of sport*, 35(4), pp.451-463.
- Light, R. (2008) "Learning masculinities in a Japanese high school rugby club", *Sport, education and society*, 13(2), pp.163-179.
- Locke, L. F. and Massengale, J. D. (1978) "Role conflict in teacher/coaches", *Research quarterly*, 49 (2), pp.5-11.
- Marsh, H. W. (1993) "The effect of participation in sport during the last two years of high school", *Sociology of sport journal*, 10 (1), pp.18-43.
- McDonald, B. and Hallinan, C. (2005) "Seishin habitus", *International review for the sociology of sport*, 40(2), pp.187-200.
- McElroy, M. A. (1979) "Sport participation and educational aspirations", *Research quarterly*, 50(2), pp.241-248.
- McNeal, R. B., Jr. (1995) "Extracurricular activities and high school dropouts", *Sociology of education*, 68(1), pp.62-80.
- McPherson, B. D., Curtis, J. E. and Loy, J. W. (1989) *The social significance of sport*, Human kinetics publisher.
- Melnick, M. J., Vanfossen, B. E. and Sabo, D. F. (1988) "Developmental effects of athletic participation among high school girls", *Sociology of sport journal*, 5 (1), pp.22-36.
- Melnick, M. J., Sabo, D. F. and Vanfossen, B. E. (1992a) "Effects of interscholastic athletic participation on the social, educational, and career mobility of Hispanic girls", *International reviews for the sociology of sport*, 27(1), pp.57-74.
- Melnick, M. J., Sabo, D. F. and Vanfossen, B. (1992b) "Educational effects of interscholastic athletic participation on African-American and Hispanic youth", *Adolescence*, 27(106), pp.295-308.
- Miller, A. (2011) "Beyond the four walls of the classroom", in Wills, D. B. and Rappleye, J. eds., *Reimagining Japanese education*, Symposium Books, pp.171-191.
- Miller, K. E., Sabo, D. F., Farrell, M. P., Barnes, G. M. and Melnick, M. J. (1998) "Athletic participation and sexual behavior in adolescents", *Journal of health and social behavior*, 39(2), pp.108-123.
- Miller, K. E., Sabo, D. F., Farrell, M. P., Barnes, G. M. and Melnick, M. J. (1999) "Sports, sexual behavior, contraceptive use, and pregnancy among female and male high school students", *Sociology of sport journal*, 16(4), pp.366-387.
- Miracle, A. W. and Rees, C. R. (1994) *Lessons of the locker room*, Prometheus book.
- National Center for Education Statistics (2005) *Youth indicator 2005*.
- Nicholson, C. S. (1979) "Some attitudes associated with sport participation among junior high school females", *Research quarterly*, 50(4), pp.661-667.
- Otto, L. B., Alwin, D. F. (1977) "Athletics, aspirations, and attainments", *Sociology of education*, 50(2), pp.102-113.
- Rees, C. R. and Miracle, A. W. (2000) "Education and sports", in Coakley, J. and Dunning, E. ed., *Handbook of sports studies*, Sage, pp.277-290.
- Rees, C. R., Howell, F. M. and Miracle, A. W. (1990) "Do high school sports build character? A quasi-experiment on a national sample", *The social science journal*, 27 (3), pp.303-315.
- Rehberg, R. A. and Schafer, W. E. (1968) "Participation in interscholastic athletics and college expectations", *American journal of sociology*, 73(6), pp.732-740.
- Roden, D. (1980) *Schooldays in imperial Japan*, University of California press.
- Rohlen, T. P. (1983) *Japan's high schools*, University of California press.
- Sabo, D., Melnick, M. J. and Vanfossen, B. E. (1993) "High school athletic participation and postsecondary educational and occupational mobility", *Sociology of sport journal*, 10(1), pp.44-56.
- Sage, G. H. (1987) "The Social World of High School Athletics Coaches", *Sociology of sport journal*, 4(3), pp.213-228.
- Sage, G. H. (1989) "Becoming a High School Coach", *Research quarterly*, 60 (1), pp.81-92.
- Sage, G. H. (1998) *Power and ideology in American Sport* (second edition), Human kinetics publisher.
- Saunders, J. E. (1987) "Comparative research in regard to physical activity within schools", in Haag, H. et al., eds., *Comparative physical education and sport* (volume 4), Human kinetics publisher, pp.107-126.
- Schendel, J. (1965) "Psychological differences between athletes and nonparticipants in athletics at three educational levels", *Research quarterly*, 36(1), pp.52-67.
- Spady, W. G. (1970) "Lament for the letterman", *American journal of sociology*, 75(4), pp.680-702.
- Spreitzer, E. (1994) "Does participation in interscholastic athletics affect adult development?", *Youth and society*, 25(3), pp.368-387.
- Spreitzer, E. and Pugh, M. (1973) "Interscholastic athletics and educational expectations", *Sociology of education*, 46(2), pp.171-182.
- Sport England (2001) *Young people and sport in England 1999*.
- Snyder, E. E. and Spreitzer, E. (1977) "Participation in sport as related to educational expectations among high school girls", *Sociology of education*, 50(1), pp.47-55.
- Snyder, E. E. and Spreitzer, E. (1979) "High school value climate as related to preferential treatment of athlete", *Research quarterly*, 50(3), pp.460-467.
- Thirer, J. and Wright, S. D. (1985) "Sport and social status for adolescent males and females", *Sociology of sport journal*, 2(2), pp.164-171.
- Tracy, A. and Erkut, S. (2002) "Gender and race patterns in the pathways from sports participation to self-esteem", *Sociological perspectives*, 45(4), pp.445-466.
- Vogel, E. F. (1979) *Japan as number one*, Harvard University press.
- Wagner, E. A. ed. (1989) *Sport in Asia and Africa*, Greenwood press.
- Weiss, M. R. and Gould, D. eds. (1986) *The 1984 Olympic scientific congress proceedings (volume 10) Sport for children and youths*, Human kinetics publisher.